

草津市立矢倉小学校通信 令和2年12月1日 NO.16



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

生活に生かす、生き方に根付くということ ～人権週間の取組から～

10月16日から始まった人権週間。今年のテーマは「つながる、ひろがる、思いやりの心～気づこう、自分や友だちのやさしい気持ち～」だ。このテーマにちなんだ内容を、ここふ学級、そして各学年から、毎朝、放送や動画で配信し、子どもたちは教室でこれを視聴する。昨年度までのような全校集会ができないかわりの企画である。さらに、こうした取り組みとあわせて、子どもたちは、やさしくしてもらったことや、やさしい心づかいができたことを書きとめ、学級ごとに「やさしさの木」という掲示物を仕上げた。「昼休み、遊びに誘ってもらった」「勉強で、友だちと一緒に問題を解いていった」など、ちょっとした心づかいをしているようすが見えてくる。それらの中から一つ二つが取り上げられ、給食時間中の校内放送で、委員会の子によって紹介されていった。やがて「やさしさの木」は先生方によって職員室前の廊下の掲示板に集められ、「やさしさの森」に育てられていった。木を植え、森を育てるというような取り組みだ。やさしい心づかいに気づき、思いやりの心を子どもたちの日々の生活に生かしていきたい。子どもたちの生き方の上に根付かせていきたいという願いが込められている。

こうした取り組みが子どもたちはもちろん、先生方の心にも響いていったからだろうか、「きのうのここふの放送はよかったね」とか「きょうは5年生が発表してくれる日や」「明日は6年生…」などと、みんながたのしみになるようになってきた。一連の取り組みは、「人権とは何か」「人権はいかに大切か」を説明するより、子どもが自分たちの生活の具体的な場面に目を向け、みつめていくことの方が、よくわかるものだ。大人にとっては、そこでみつけた子どもの思いに耳を傾け、よくみつけれられたなあと認めたり、ほめていったりすることに力をいれていく…、そんな姿勢にもつながっていく。

学校運営評議委員会では来校された委員のみなさんにも、学年学級からの配信内容をみていただいた。「2年生になると、しっかりとしてくるんですね。話す言葉に力があって、語りかけている姿があった。自分のことばになっていて、いいですね。」「3年生、4年生は、ポッチャやゴールボール、アイマスク体験、車いす体験で学んだことが、しっかりまとめられている。」などと、お褒めの言葉をいただいた。

人権週間が最終日を迎えた日のこと。校門であいさつをしていると、「おはようございます」のかわりに、何人かの子が「きょうは校長先生や。」というあいさつをした。初めのうちは、何のことか、ピンとこなかったが、しばらくして、その言葉の意味がわかった。お母さんと一緒に登校してきた2年生の子が、おはようのあいさつの後、「ねえねえ、校長先生、きのうは6年生。今日は校長先生の番。」と教えてくれたのである。お母さんからは、「このところ、家に帰ってくると朝の放送のことを話してくれていて、きのうはずっと6年生の発表がすごかった、かっこよかったと言っているんです。」と。戦争のこと、原爆投下のことを詳しく調べる6年生にあこがれたのだろうか、それとも学んだことをもとに、自分たちにできる平和への取り組み宣言に感動したからだろうか。

確かにその日は校長である自分の番だと了解していたものの、これほど期待され、子どもたちに意識されているとは思ってもよらなかったのである。先生方によるはたらきかけはもちろん、子どもたちが家で家族に話をし、ふりかえっていること、しかも家族がその話にちゃんと耳を傾けてくださっていること、こうした支えがあってこそのことだと、一連の取り組みの重みを感じずにいられなかったのである。

かたちばかりの放送にならないように、子どもたちの生き方に根付いていきますように、そう念じながらマイクの前に立つ私は、いつも以上に緊張しおどおどしてしまっていた。 校長 大林道範